

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村
山田孝雄
出津田左右吉
和辻哲郎

竹田出雲集

鶴見 誠校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書第七十七回配本

「竹田出雲集」 ◎ 鶴見誠校註

昭和三十一年十一月十月初版發行

整版所 株式會社井村印刷所

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 三八〇圓

目次

解説

作者の解説……………三

イ、竹田出雲と竹田小出雲……………三

ロ、三好松洛……………三

ハ、並木千柳……………三五

作品の解説……………元

イ、菅原傳授手習鑑……………元

ロ、義經千本櫻……………四

ハ、假名手本忠臣藏……………四

凡例……………六

本文

菅原傳授手習鑑……………空

義經千本櫻……………一七三

假名手本忠臣藏……………二五八

竹田出雲集

鶴

見

誠

解説

作者の解説

イ、竹田出雲と竹田小出雲

出雲・小出雲の傳記は、今のところまだ明かにされてゐない。最近諸家の研究によつて、非常に進んでは來たけれども、なほ疑問の點が少くない。それは出雲掾といふ名が、代々踏襲されてゐる爲に、區別が困難なのである。ここに述べる私の解説も、推測に過ぎない部分もあつて、今後は正されるかも知れないものである。

竹田家は元來大阪道頓堀において、「からくり芝居」を興行し、非常に富み榮えた一家である。諸書の傳へる所によると、初代の竹田近江藤原清房は、阿波の人（一説に阿波國美馬郡半田町の出生で、同町の神宮寺に墓があると）であつたが江戸へ出て、淺草觀音の示現によつて、からくり人形を工夫し（又砂時計をも工夫し）、京都へ上つて萬治元年十二月一日、出雲目（清定出雲に與へた近松の推薦文によつて推するに、出雲掾は出雲少掾とするのが正しいのであらう）を受領し、「竹田からくり」の名代を得た。そ

して翌萬治二年五月二日に、再び近江少掾（五月三日、近江大掾とも）を受領した。従つて初代の清房は、出雲と近江と二つの名目を受領した事になる。然し近江を受領した後の清房は、當然近江名を用ゐたことであらう。で、この初代近江は、寛文二年大阪の道頓堀において、始めて「からくり芝居」を興行した。これが彼の「大阪道頓堀竹田の芝居、錢は安ても面白い」と、子守歌にまで唄はれ、大阪の名物として末永く繁昌した、竹田芝居の創始である。其後近江の名は、受領といふ事の爲もあつて、二代清孝、三代清英、四代清宗（一説に清一）、五代清可、六代清壽、といふやうに連綿として續いて、竹田芝居を經營してゐた事が解る。

さて出雲目の方はどうであつたかといふと、今迄の研究ではまだはつきりしてゐない。思ふに寛文・延寶年間、初代近江清房が大阪へ下つて後も、京都の四條河原で出雲掾の名目で、からくり芝居を興行してゐたのではあるまいか。祐田善雄氏の調査（近世文藝創刊號、昭和二十九年十月刊）でも、寛文九年頃、京都に出雲の名代があるやうであるし、私の見た吉野五運の収集による「許多脚色帖」（あまたきやくしよくでふ）にも、寛文から延寶にかけての京都の名代の中に、「モノマ子 竹田出雲」とあり、「モノマ子と立て願ひしが則大歌舞伎の事なり」とあつた。「出來齋京土産」（延寶五年刊）の四條河原の所には、「計鶏（とけ）のからくり」のあつた事が記されてゐる。よつて考へるに、初代近江清房が大阪へ下つた後も、京都では四條河原において、出雲掾の名代を以て、機巧（からくり）を興行してゐたと思はれる。そして更に大歌舞伎にも手を廣げたりした事もあるの

ではあるまいか。然しその興行をやつてゐたのは誰であつたか、もとより解らない。さて木谷蓬吟氏の報告された、竹田家の「日月牌靈名誌」によると、延寶七年の六月三日に竹田出雲の子が死んで居り、同年の九月六日には、妻が死んでゐる。延寶七年といふと、普通に淨瑠璃作者とされてゐる清定出雲はまだ生れてゐないし、その父と思はれる、初めて竹本座の座本となつた奚疑出雲（俳號を千前軒奚疑と號してゐるので、奚疑出雲と呼ぶこととする）は、まだ十代ではないかと思ふ。延寶七年に妻子に死なれてゐるとすれば、その人は若く見ても三十歳に近い事であらう。これを奚疑出雲とすると、百歳位まで長生する事になるので、どうしてもこの出雲は、もう一人別の出雲でなければならぬ。これは全く想像であるけれども、この延寶七年に妻子を失つた出雲は、初代近江清房の弟といったやうな縁者で、従つて兄清房から出雲の名を譲られ、清房が大阪へ下つて後は、その後を受け繼いで、寛文延寶年間を京都四條河原で、機巧興行をやつてゐたかと考へるのである。そして、かうして大阪に妻子を葬つてゐる所から推測すると、その前に（延寶六年？）京都を引揚げて大阪に下り、兄近江の許で働くやうになつてゐたのではあるまいか。そしてやがて金が出来て竹田の芝居主などやるやうになつたのであらう。（この想像説は元祿十年刊の「國華萬葉記」に「道頓堀芝居主 竹田出雲」とある事から考へて見たものである。元祿十年といふと奚疑出雲は未だ三十代である。これを奚疑出雲として見ると、三十代では若過ぎるから、やはりその親の代から芝居主をしてゐたものと想像するのである）その内に子供が三十歳にもなり、然も才能に富んでゐた

ので、出雲の名と芝居主の位置とを譲つて、自分は外記と改名した。元祿四年に外記の子が死んでゐる所から見ると、その改名は元祿四年の少し前であらう。この外記が正徳五年八月八日に死んだ初代外記「法船院潭月淨雲居士」である。そして出雲名を受け繼いだ人こそ、他ならぬ千前軒奚疑出雲で、後に寶永二年竹本座の座本となつた有名な出雲であると私は推定する。なほ元祿十年刊行の「國華萬葉記」に見える「道頓堀芝居主 竹田出雲」といふのは、父の仕事を受け繼いだ、この奚疑出雲ではあるまいか。

大分ごたごたしたやうであるから、ここで一應整理して置かう。竹田出雲掾といふ名は、萬治元年十二月一日、初代近江清房が初めて受領したものである。然し清房は翌年近江少掾を受領し、出雲掾はこれに譲つた。その弟は兄が大阪へ下つて後も、京都に留り、四條河原で竹田出雲掾と看板を掲げて兄の工夫に成る時計の機巧などを興行してゐた。そして（大歌舞伎などに手を出したので失敗し？）、延寶六年の頃兄を頼つて大阪へ下つた（在京約二十年）。専ら兄を助け又助けられて働く内に産を成して、竹田芝居の芝居主の位置につくやうになつた。やがて息子が三十歳の働き盛りになり、腕もあるので、出雲掾の名と芝居主の位置とを譲つて、自分は外記と改名した。この息子出雲こそ竹本義太夫を激勵し、自ら竹本座の座本を買つて出た、豪膽な千前軒奚疑出雲である。（在來の説では、この座本出雲を初代近江の子としてゐるが、それを外記の子としたのは、祐田氏の推定説に従ふものである）

さて享保十二年刊行の「今昔操年代記」の傳へるところを見ると、

「そねざき心中と外題を出しければ。町中よろこび。入ほどにけるほどに。木戸も芝居もゑいとうゑいとうこしらへに物は入らず。世話事のはじめといひ。淨るりはおもしろし。少しの間に餘程のかねを儲け。諸方のとゞけも笑ひ顔見てすましぬ。此上に望もなしと後生心に成。きめうむりやうじゆ如來に身をまかせ。芝居も是切に安樂國土きはめんと。明暮御堂に參り。あさじ日中お八つをかゝさず。一心ふらんにしやうしんげ。御和讃のふし猶殊勝にきこゑぬ。折ふし竹田氏參會し未だ老木といふにもあらず。今町中しやうびする所に。おもひよらぬ引込じあん。二三年勤て給らば。拙者座本仕。萬事の世話を引請。貴殿内證入用銀御用次第つゞけ不自由させまじと。同行衆を以て頼みしかば。下地は好なり御意はおもし。いか様ともの詞をきわめ。盃すんで其暮。かほみせ淨るりといふをはじめ。

用明天王職人鑑。作者近松門左衛門をかゝへ。太夫竹本筑後掾。座本竹田出雲と看板並べ」

つまり竹本義太夫は、寶永元年の秋から病氣でもあつたし、この曾根崎心中の大當りを機會に引退しようとした。それを聞いた竹田氏が、義太夫を激勵すると同時に、自ら座本を引き受けることを申出、この危い水商賣に金は如何ほどでも出さうと約束したのである。然も寶永二年に座本竹田出雲掾となつてからは、色々と機巧的演出の策を與へて作者近松を助けると共に、太夫の引抜き工作などにも骨を折つて、大いに竹本座の隆盛の爲に働くのである。この大膽で、策もあり金もある竹田出雲掾については、古來種々の説があるけれども、私は第一に寶曆九年七月、四代目近江大掾によつて出版された、「倒冠雜誌」の記

載を信じたい。それによると、

「……然ル處十三年以前元祖竹田出雲死去被致候後は役儀萬端我意を致……樂屋之者をかたらひ親方出雲申條ニ相不叶……」

とある。この我儘者は人形遣の名人吉田文三郎であるが、それは免に角として、寶曆九年より十三年以前に死んだ人といふのは、竹田家の「日月牌靈名誌」によると、延享四年六月四日に死んだところの、竹田外記こと「諦相院潛哲奚疑居士」である。つまりこの外記が文中にいふ元祖竹田出雲であり、寶永二年に竹本座の座本となつた奚疑出雲であると推定して、先づ間違ひはないと思ふ。そして又引用文中に見える親方出雲とは、奚疑出雲の跡を繼いで座本となつた、千前軒清定出雲と考へて宜しいであらう。然も竹田一門は既に道頓堀芝居町の顔役となつて居り、元祿七年頃から、近江はその東半分立慶町の年寄役を、外記は西半分吉左衛門町の年寄役を勤めてゐたといふ。して見れば、初代近江清房が始めて大阪に下つて、竹田芝居を始めた寛文二年から、四十餘年を経た寶永二年の頃には、早くも功成り産を成し、道頓堀の芝居仲間では、押しも押されもしない社會的位置に昇つてゐたのである。その吉左衛門町の年寄役である初代外記の子で、當時多分四十幾つかで、竹田芝居の芝居主をしてゐたかと思はれる働き盛りの奚疑出雲が、竹本座の座本を買つて出ることは、あり得ることであり、この人ならばと納得出来ることであらう。興行に大金を抛つにしては、一寸歳が若いと考へられぬこともないが、そこが奚疑の傑物たる所以であ

り、事は又若さの意氣が要ることでもあつた。それに出雲掾といふ名は、突然竹本座の座本として出て來たものではあるまい。竹田芝居關係で出雲の名が傳へられてゐたとすれば、それは初代外記から受け繼いで、既に奚疑が持つてゐたとするのが、尤も妥當であると考へる。

さてこの出雲の名は、年を取ると後繼者に譲つて、當人は外記と改名するのが吉例になつてゐたやうである。初代外記から奚疑へ、奚疑から清定へ、清定から小出雲へと、この原則が適用されるかに思ふ。従つて私は、大體初代外記が六十歳になつたので、その子奚疑に出雲を譲つたと考へてゐる。そこで今度は奚疑から清定への、出雲繼承の時期について考察せねばならぬのであるが、それは彼の有名な淨瑠璃作者竹田出雲は誰か、といふ問題と併せて考へなければならぬ。

作者竹田出雲の名が始めて作品の上に現れるのは、享保八年二月十七日竹本座上演の「大塔宮囃鏡」である。即ち「添削者 近松門左衛門。作者 竹田出雲・松田和吉」とある。享保九年七月十五日竹本座上演、「諸葛孔明鼎軍談」（出雲の單獨作）の、繪番附の初めに、次のやうな一文が載つてゐる。

竹田出雲少掾千前、予が淨瑠璃作文を深信じ、心を付て工夫を凝し、品々はなやかにめづらかなる趣向を編、予に添削口傳を受、蟠龍の時を待こと十年餘、今度、諸葛孔明鼎軍談、出雲掾一人の心服より出、一字一點予が添削琢磨の筆を加ず、善哉く、迫譜^{せりふ}、わたりもぢり、およぎ等、文字の活亡^{へきしに}、悉予が祕する所にかなひ、瓶に瓶に心水を移がごとし。故節^{かろがせ}にかけて口にあまらず、たらぬことな

く、操の小間あかず國姓爺に肩をならぶとの評判、又樂しみにあらずや、粵に至て、淨瑠璃作者、竹田出雲と題せんに誰か非なりと云ん、木に竹は繼れずといへども、近松が流義は、竹田を根繼とし、松竹の千年萬世も、常盤かきはに此道の榮行末を祝、序を述るものしかなり

平安堂近松七十二歳書

作者竹田出雲は十年間の準備練習期間を終つて、ここに大近松の推薦と讃辭を得て華々しくデビューした譯である。この出雲を奚疑出雲とする説もあるが、私はやはり通説の通り清定出雲であると思ふ。何となれば、清定は寶曆六年十一月四日、六十六歳で死んでゐるから、享保九年には三十三歳である。そして淨瑠璃を書き始めたのは、丁度十年前として二十三歳から、といふ事になつて極めて妥當な年齢である。これを奚疑出雲とすると、清定の親であるから、先づ二十歳は多く見なければなるまい。すると五十三歳で、近松の序文をもらつてデビューした事になる。これは年齢から考へても不適當である。然も普通清定には、三代目近江大掾を繼いだ清英といふ兄があつたとされてゐるのであるから、この五十三歳はもつと多くなるのである。その年輩で、この事ありとはどうしても信ぜられない。それに、出雲の初期の作品から既に、丸本の奥付を見ると、

予以著述之原本校合一過可爲正本者也

と書いてあるものが多い。又この出雲を奚疑とすると、奚疑は延享四年六月四日に死んでゐるから、「手習鑑」は書いたけれども、「千本櫻」と「忠臣藏」は書かないといふことになる。この三大作の作者出雲が二人に分れるのであつたら、あれだけ多く刊行されてゐる當時の淨瑠璃關係の諸書に、何か記載がある筈である。それが無い所を見ると、この時代の作者出雲は一人であつて、それはやはり清定出雲であると決めて宜しいのであらう。

すると奚疑はこの享保八年に、作者出雲が出来る前に出雲を譲つてゐなければならぬ。思ふにそれは享保八年を溯ること、僅か一・二年といふ年ではないであらうか。既に三十歳になつた秀才清定の爲に、親奚疑は喜んで出雲掾を譲り、同時に座本の位置を與へたのであらう。そして奚疑は外記となつた。けれどもこの親子間の受け渡しは、世間では問題にしなかつた。何しろ實權はやはり奚疑にあつて、實質的には何等變りはなかつたのである。享保十二年刊行の「今昔操年代記」に、竹本座のことを「今の竹田外記芝居」といつてゐるのは、この間の消息を物語るものと思ふ。

さて奚疑出雲は、淨瑠璃作者として名を出さず、作品も残さなかつたが、實際には作の相談に與り、殊に演出に關しては寄與する所が大きかつた。「今昔操年代記」に

竹田出雲頓智發明より。國性爺合戦といふ淨るりのおもひ付。

とあるが、これは「國性爺合戦」が、座本奚疑の頓智發明に負ふところが大きい事を示すものである。又

寶曆六年刊行の「竹豊故事」に

元祿年中 of 末竹田出雲掾竹本氏の座本となられ人形操道具建に至る迄美を盡さるゝにより益々繁榮して流義弘まりぬ

とある。かうした事は、寶永二年から享保七年頃まで（約二十年間）、彼が座本であつた時代には、殊に力を盡すことが大であつたであらう。新しい作者と座本が出来ても、それは子であるし、その道の大長老であるのであるから、折りに觸れ時に應じ、相談にもあづかり策を與へもして居たであらう。であるから「竹豊故事」には、作者の面々の中に奚疑のことを、「筑後の座本竹田故出雲」として、名を擧げたのであると思はれる。それであるから又、「瑠璃天狗」（文化三年序）の傳へるやうに、作者小出雲が、わざわざ江戸に居る奚疑の許まで、「新薄雪物語」（寛保元年五月十六日、竹本座上演）の道行文について、飛脚を馳せて添削を乞ふたりする譯である。

享保八年から世に作品を公にし始めた竹田出雲掾清定は、大近松の後繼者として、其後引き續き作品を書いた。そして若かつた彼も、寶曆元年には、六十歳になり還曆を迎へた。そこで彼は親達の吉例に倣つて、外記と改名し、出雲をその子小出雲に譲つたものと思はれる。寶曆元年の「役行者大峯櫻」から、寶曆三年の「愛護若名歌勝閑」までの四作に、作者竹田外記の名が載つてゐる。所がここに一つの事件が起つた。それは切角出雲を譲つた小出雲が寶曆三年七月二十一日に死んで了つた事である。そこで清定は、